2024年3月3日 No.3709

先週の講壇から

“ 昼も夜も ”

ルカによる福音書 第18章1節～14節

聖句「まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあるか。」(18:7)

1. 《人間の心の働き》 札幌時代、自家用車が凍結した道路でスピンしたために後続車2台と玉突き事故を起こしたことがあります。保険の示談交渉も上手く行かず、鬱状態になりました。気が付くと、事故を起こした場所を避けて遠回りをしていました。新聞にも載らない小さな事故でも、当事者にとっては大きな痛手となっているのです。私も自分を責め続けていたのです。
2. 《幸せを探す作業》 「自分の心だから、自分で何とか出来る」と考えるのは大間違いです。自分では何とも出来ないのが心なのです。転倒による骨折などの場合でも、家族や周囲の人たちの対応ひとつで治りが違います。周囲の人が無神経なことを言って、本人の気持ちを逆撫でして、痛手を深くすることがあります。むしろ不自由な思いをして、自分を責めている本人を慰め、安心感を与えて上げるべきでしょう。実は「心」というものは、自分の中にあるものではなく、私と他の誰かとの間にあって生じるものなのです。私の事故の場合には、助手席で寝ていた息子が無傷だったこと、人身事故にならなかったことが「不幸中の幸い」でした。人生にとって大切なのは「不幸探し」ではなく「幸せ探し」だったのです。
3. 《ハッピーエンド》 あれこれと「不幸の原因」を探し続けることを「犯人探し」と言います。誰か悪い人(犯人)を見つけようとするのです。けれども、イエスさまは「不幸せを探すのではなく、幸せを探す作業をなさい。それが人生ですよ」と仰っています(「ヨハネによる福音書」9章3節)。また、ジョン・レノンは「未来は君が望むようにしかならないよ」と言っていました。私たちは「幸せになりたい」と言いながら、不幸せを探しているのかも知れません。薔薇色の未来などはありませんが、それでも幸せを探し続ける必要があります。何の力もない寡婦が、権力の絶頂にあり、神をも畏れない「不正な裁判官」を動かすのです。寡婦が「気を落とさずに」「ひっきりなしに」「昼も夜も叫び求め」続けたからです。私たちは果たして、心の底からハッピーエンドを神に求めていますか。

朝日研一朗牧師